

第一編

自然

1

大口町史 現代史編

- 第1章 地誌と気候
- 第2章 生物
- 第3章 災害





# 第一章

# 地誌と気候

## 第一節 地誌

大口町は、愛知県の北西部にあり、犬山扇状地の南東部に位置している。平成の合併以降、隣接市町は、北に扶桑町、東に犬山市、西に江南市、南に小牧市である（1-1-1）。名古屋市から直線距離にして約二〇kmの近郊地域にあ



1-1-1 位置図 (●は役場)

たり、桜の名所となっている五条川や広大な田園地帯が豊かな自然を育んでいる。

地形は、過去一万年にわたり木曾川及びその支流により形成された犬山扇状地から成り、粗粒な砂れき層により構成された沖積低地（沖積平野）である。町域は、北東から南西に向かって木の葉のような形をし、中央を五条川が流れ、北東から南西にかけて緩やかな傾斜をもつ。標高は、北端で海拔四〇m、南端で海拔一五mであり、町域の中央に位置する役場付近が海拔二五mで、役場の位置は、東経一三六度五四分二八秒・北緯三五度一九分五六秒である。

道路網は、国道が町域内に二路線あり、国道四一号（名濃バイパス）が町内を南北に、国道一五五号（北尾張中央道）が町南部で東西に通っている。県道は小口岩倉線・小口名古屋線・外坪扶桑線・若宮江南線・宮後小牧線・草井羽黒線・斉藤羽黒線の計七路線あり、その他、都市計画道

路・農業用・生活道路などの町道で構成されている。

公共交通機関は、鉄道としては町域外の西側を沿うように名鉄犬山線が通っており、名鉄柏森駅・江南駅・布袋駅などが最寄りの駅となっている。その他の公共交通機関としては、コミュニティバスが基幹ルート・北部ルート・中部ルート・南部ルートとあり、町内の主要施設と名鉄柏森駅・江南駅・布袋駅をつないでいる(第二編第二章第四節)。

面積

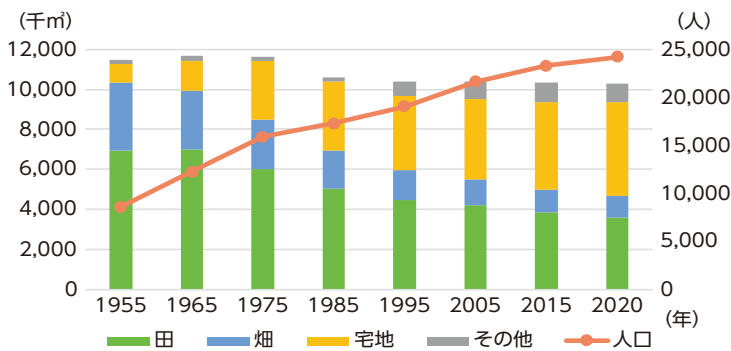
大口町は、東西約三・六km、南北約六・一km、総面積が一三・六一km<sup>2</sup>である(国土地理院の面積調の測定方法が変更されたことともない、面積は二〇一四(平成二十六)年から〇・〇三km<sup>2</sup>増加した)。

戦後の町内における地目推移をみると、一九五五(昭和三十)年と二〇二〇(令和二)年の比較から、人口の増加にともない、宅地は五倍弱の増加に対し、田は半減、畑は七割近く減少しているのがわかる(1-1-2)。

農業の変化(兼業化・離農)とともに、一九七〇年十一月、都市計画法に基づく市街化区域と市街化調整区域の区分が決定されると、市街化区域では区画整理事業や住宅開

発により、農地の宅地化が進んだ。

	人口(人) (各年10月1日)	私有地(千㎡)(各年1月1日)			
		宅地	田	畑	その他
1955	8,552	941	6,926	3,402	209
1965	12,248	1,505	7,012	2,927	217
1975	15,894	2,940	6,000	2,470	230
1985	17,247	3,420	5,050	1,900	220
1995	19,031	3,717	4,461	1,508	703
2005	21,602	4,021	4,180	1,297	873
2015	23,274	4,384	3,827	1,172	947
2020	24,220	4,667	3,597	1,096	961

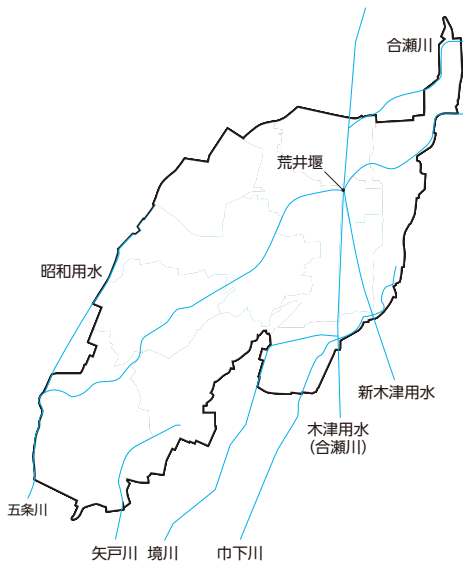


1-1-2 私有地の地目推移 (『愛知県統計年鑑』)

## 大口町を流れる河川

町域を流れる河川は、愛知県が管理する五条川・木津用水（合瀬川）・巾下川・境川・矢戸川の五川と、二十余の水路がある（1-1-3）。

昔から水田の大切な水源として利用された多くの小川は、田から田へと流れ、再び下流で流入するいわゆる用水兼排水路となっていた。しかし、水田の基盤整備事業の進捗とともに用排水路が分離され、多くの河川は改修・整備をおこない、今日では排水路としての役割を持つものが多くなり、地内を流れていた小川は、ほとんど姿を消した。



1-1-3 河川地図

## 五条川

河川改修の完了を機に一九五二年から翌年にかけて桜の植樹がおこなわれた五条川堤は、春になると美しい桜並木で町民の憩いの場となっている。

五条川は、岐阜県多治見市北小木町の高社山付近を源流とし、愛知県犬山市の八曾山の南を通り入鹿池に流れ込む。そして、入鹿池の南西から流れ出て約3kmの地点で、北上し木曾川に流れ込む新郷瀬川と、西方に向かう五条川に分かれる。この地点から上流は各市町村が管理する準用河川の五条川、下流は県が管理する一級河川の五条川となる。その後、犬山市から大口町に入り、江南市・岩倉市を通り、北名古屋市・一宮市・稲沢市の境界を進み、清須市を南下し新川に流入する（1-1-4）。

五条川の名称の由来はいくつか説があり、清須城下にかかる「御城橋」の御城から転化したという説、五河川（幼川・矢戸川・境川・巾下川・青木川）が合流するため五条という名称をつけたという説、あるいは古代土地制度の条里制からとった説がある。

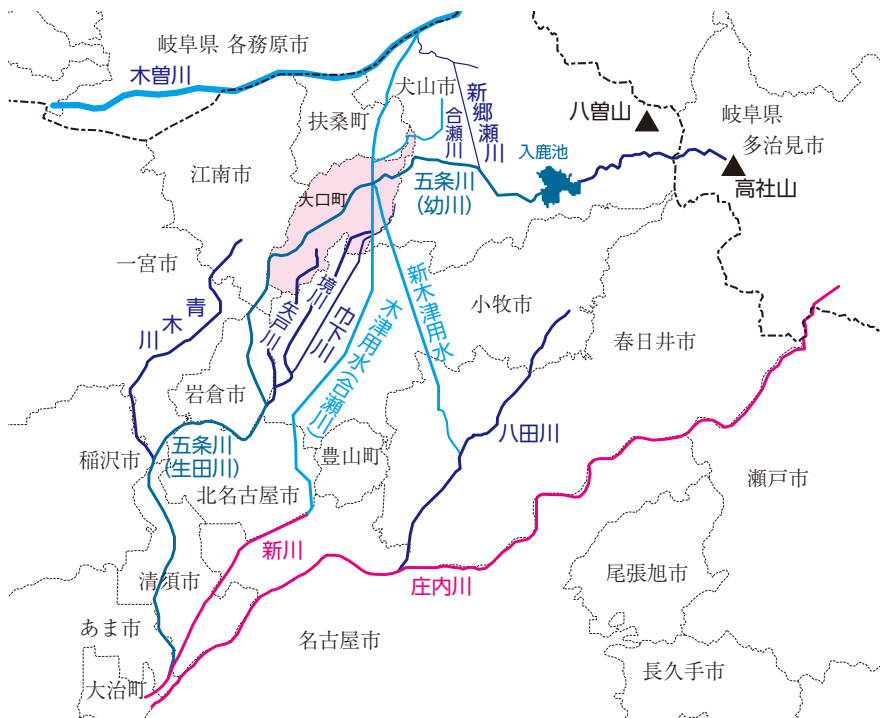
また、かつて五条川と呼ばれていた流域は、現在の一宮市五日市場の青木川合流点から下流域のことで、上流の岩

倉市大山寺までを生田川、さらに上流は幼川（稚川）と呼ばれていた。幼川と名前を変える大山寺あたりに「曽野」という地名があり、これに敬語を加えて「御曽野」になり、幼川や稚川に転化したという説もある。

### 木津用水・新木津用水

町内を南北に流れるのは、江戸時代の初めに開削された木津用水（合瀬川）と新木津用水である。

木津用水の流路は、木曾川から水を取り、町域を北から南に直進し、新川に流れ込む。町内では、所々で水を取り、用水として田畑を潤し、船による輸送路としても大きな役割を果たした。新木津用水の流路は、荒井堰を通過後に分離し、春日井市で八田川に合流する。八田川は、その後、庄内川に流れ込む（第二編第二章第二節）。



1-1-4 河川流路図

## 第二節 気候

### 気象の変化

一九八五（昭和六十）年に開催された地球温暖化に関する初めての世界会議（フィラハ会議）をきっかけに、日本でも次第に地球温暖化による気象の変化が注目されるようになった。平成の半ばになると、短時間で局地的な大雨が降るようになり、二〇〇八（平成二十）年には「ゲリラ豪雨」という言葉が使われるようになった。

このような気象の変化は、町内でも、一九八〇年代と二〇一〇年代の数値の比較から読み取ることができる（1-1-5）。どの項目でも、二〇一〇年代の方が、数値が高い傾向にある。

丹羽広域事務組合消防本部（以下「丹羽消防本部」）が一九七六年に観測を始めてからの最高気温は、

	1980年代	2010年代
平均気温（℃）	12.5 ～ 15.4	15.3 ～ 16.9
最高気温（℃）	28.9 ～ 40.0	37.0 ～ 39.9
最低気温（℃）	-9.0 ～ -3.5	-6.0 ～ -3.1
降水量（mm）	919.0 ～ 1573.8	1576.0 ～ 1988.0

1-1-5 気温と降水量の比較（丹羽広域事務組合消防本部『消防年報』）

一九八三年八月十五日の四〇℃、最低気温は一九八一年二月二十八日のマイナス九℃である。

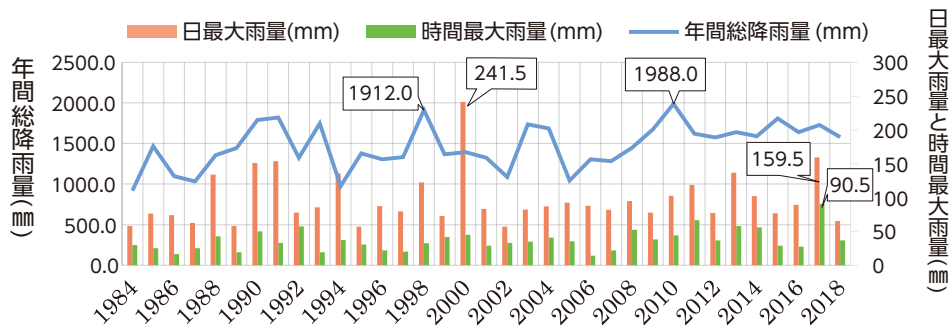
### 降雨量

年間総降雨量は、上下の推移は激しいものの総体的に右肩上がりといえる（1-1-6）。

一九八三年から使われるようになった「記録的短時間大雨情報」という用語が、平成に入ると頻繁に聞かれるようになった。数年に一度しか発生しない短時間の大雨を観測・解析したときに気象庁が発表するもので、土砂災害や中小河川の洪水災害の危険を知らせるのが目的である。

丹羽消防本部での観測で、一日当たりの降雨量が最も多かったのは、二〇〇〇年九月十一日に記録した二四一・五mmで、梅雨時の六月・七月における、一月の総雨量に匹敵した（東海豪雨）。

また、一時間当たりの降雨量が最も多かったのは、二〇一七年八月十八日午後十時から九〇・五mmである。同年七月十四日にも午前十時から一時間で七五・五mmを観測し、町内を含む近隣市町では、道路冠水や床上・床下浸水が発生した。



1-1-6 年間総降雨量・日最大雨量・時間最大雨量（丹羽広域事務組合消防本部『消防年報』）

	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	備考
年間最多風向	北西	北西	北東	北東	北東	北東	北西	北東	西	北西	北東:5回
年間平均風速	2.62	2.9	3.1	3.2	2.9	3.0	3.0	2.9	3.2	3.1	平均3.0m

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	備考
年間最多風向	東北東	東北東	東北東	東北東	東北東	東北東	西北西	西北西	西北西	西北西	東北東:6回
年間平均風速	2.6	2.6	2.6	2.7	2.7	2.5	2.3	2.3	2.4	2.3	平均2.5m

1-1-7 年間平均風速・最多風向（丹羽広域事務組合消防本部『消防年報』）

### 風速・風向

一九八〇年代と二〇一〇年代を比較すると、年平均風速では、二〇一〇年代の方が若干弱まっている。風向については、一九八〇年代では北東、二〇一〇年代では東北東からの風が多い（1-1-7）。

また、十二月から二月にかけて、西・北西・西北西からの風が吹くことが多い。大口町から西北西の方角には伊吹山（1-1-8）があり、この時期に吹く冷たい風を「伊吹おろし」と呼ぶ。「おろし」とは、日本海側に雪を降らし、山を越えて太平洋側に吹く乾いた冷たい風のことであり、越えてきた山の名前をつけて「〇〇おろし」という名称が日本各地に存在する。伊吹おろしは滋賀県の伊吹山から吹き降りし、濃尾平野から渥美半島まで風が届く。最大風速は秒速10〜15m程度である。

なお、丹羽消防本部で記録した最大瞬間風速は、一九九八年九月二十二日に観測した四三・七mである。これは、台風第八号が二十一日十六時に和歌山県田辺市付近に上陸し、台風第七号が翌二十二日十三時過ぎに強い勢力のまま和歌山県御坊市付近に上陸したためである。この二つの台風によって各地で大雨となり、台風第七号の中心が通った





1-1-8 町内から望む伊吹山

範囲では暴風となった。伊勢湾台風（一九五九年九月）の際に名古屋地方気象台が記録した最大瞬間風速である四五・七mに匹敵する風速であった。

